

筆山

第35号／2003年12月

土佐中・高等学校同窓会 関東支部会報

編集人/西岡 恒憲 (41回)

〒251-0875 藤沢市本藤沢7-3-7 山中和正(24回) 気付 事務局長 金澤由里(55回) TEL&FAX 0466-82-2445

E-mail : tosaiko-kantoshi bu@mail.ne.jp 関東支部ホームページ : <http://www.tosako-kanto.org/>



近藤さんご夫妻を囲んで同窓有志の祝いの宴 (1988 年10 月 池袋の「はりまや」にて)

ラテルネの灯を点しつつづけて

曾和 純一 (16 回)

昨年は進藤貞和、平井康三郎、北岡龍海といった先輩が次々に鬼籍に入られたが、今年も8月26日近藤久寿治さん(6回生)が後を追って他界された。

それぞれ卒寿を超える長寿を全うされ、同窓会の発展、母校の活性化に貢献された方々であるが、中でも近藤さんは同窓会の産みの親、育ての親であり、この「筆山」も遡れば辿り着く源であった。

近藤さんは大学卒業後直ちに出版業界に入り、4年後の一九四〇年茗荷谷の自宅を本拠に独立して「元宇館」を創業する。第二次大戦による統制が解除された戦後逸早く「同学社」として再出発し、模索を経てドイツ語関係の出版を主流に、ラテルネ(ランタンに当たるドイツ語)を社章にかざして終生社長として社業の確立に導いた。

社業にはときに栄枯盛衰の変化はあっても近藤さんの同窓会に寄せる情熱と活動への支援はいささかも変わることもなく、ラテルネの灯のように着実に足もとを照らしつつづけてきた。それを支えたものは、母校愛、とりわけ三根円次郎初代校長に対する報恩感謝の念であったに違いない。

筆山会の年中行事に定着した三根校長墓参の会の推進者であった近藤さんが、一九九三年夏、多摩墓地に赴く途上発症した脳梗塞から不死鳥のように回復して、後日この悲願を果たした後に酌み交わした酒は満足感、達成感に溢れた酒であった。

さきごろ、同学社に近い龍閑寺の墓地に納骨を済ませた後の集いの席で、15年前の重陽の日の「喜寿と金婚を祝う会」のビデオに故人を偲びつつ、後につづくものとしてラテルネの灯を点しつつづけばと思いを新たにしたことである。

第2回 土佐高同窓会関東支部 若手の会

中島隆介 (73回生)

去る平成15年10月4日(土) 東京原宿にある632Harajukuにおいて、今年で2回目となるTOSA 70's Party(土佐高校同窓会関東支部若手の会)が開かれました。

この集まりは関東在住の70回生から今春土佐高校を卒業した78回生までの70回代の若手の親睦を深める目的で昨年から始まった企画です。今年の会場は去年のシックで大人びた雰囲気だった店尾の羽澤ガーデンから、若者の街と呼ばれる原宿の632Harajukuというお店に移しての開催でした。お店の雰囲気はというと、モダンなインテリアと中庭風のテラスの様な内装が非常に印象的で、原宿という繁華街



にありながらも路地を一つ入ったところにあるため、表通りの喧騒が嘘のように静かで落ち着いた雰囲気でした。

案内状に開始が6時と書かれていたため私は余裕を見て10分ほど前に会場に到着したのですが、既に到着している人たちが結構いて皆さん久々の再会を喜んでいるようでした。

最初に来賓の方々の挨拶の後、宮地貫一同窓会関東支部長に乾杯の音頭を取っていただいたパーティは始まりしました。乾杯の後には各自思い思いにお酒を楽しんだり、おしゃべりに興じたり、座ってゆっくりと料理に舌鼓を打っていたりと皆さんくつろいでいるようでした。料理はビュッフェ

スタイルでローストビーフなどの肉料理やスモークサーモンといった魚料理、3種類のパスタやサラダ、自家製パンなどボリューム・味ともに非常に満足のできる内容でした。私個人としては自家製パンが特に気に入りで一人で5個くらいいただいでしまいました。

会場には約一〇〇名の土佐OB・OGが集い、会場内のあちこちで懐かしい土佐弁が響いていました。私も一瞬高知に帰ったかのような錯覚にも陥りました。私の学年である73回生は参加人数が他の回生に比べて少なく、パーティの最初の方は話す相手を見つ



けられず少しさびしいかなと感じましたが、すぐに昨年の会に参加して親しくなった他の回生の人たちを見つけて話を弾ませることができました。楽しい時間ほど過ぎるのも早いものであつたという間に2時間がたち、お開きの時間が来てしまいました。2次会は回生ごとに飲み直したり、パーティで仲良くなったもの同士で個別に2次会が行われたようです。

私は上京して5年余りになりますが関東同窓会の集まりは去年の70's Partyでの参加が初めてでした。それまでは卒業生同士のつながりなんてまったく考えたことさえなかったのですが、こういった集ま

りに参加してはじめて土佐高の世代を越えたつながりや結束力の固さを実感することができました。そして、去年参加したおかげで縁あって今年の土佐高同窓会関東支部総会の世話役もさせていただきました。そういう意味でこの若手の集まりは私にとって非常に貴重な経験だったと思います。

改めて、企画から準備をしてくださった幹事の方々にお礼を申し上げたいと思います。最後に来年は私も企画側の立場として携わることが出来ればと思っております。また来年、TOSA 70's Partyを通して知り合った方たちとお会いできる日を楽しみにしております。



関東支部活動報告

事務局長 金澤由里 (55 回生)

皆さまこんにちは。11月になり、新宿高島屋や東京ディズニーストリートがクリスマスマスの装いになり始めました。この号がお手元に届く頃には、皆さまも新しい年を迎える準備にお忙しくしていることと拝察いたします。

来年度学年幹事会は1月31日(土)、総会および懇親会を5月30日(日)に、独立行政法人国立オリンピック記念青少年総合センターにて開催いたします。来年は会場予約の関係上、前倒しの開催になっておりますので、どうぞよろしくお願い致します。学年幹事会当日には、総会準備委員会を発足します。末尾4の回生の方は、是非ご参集ください。

振り返って、先の6月の関東支部総会ですが、関東の中学生のよさこい踊りを間近で見ることができました。8月末には、何かと話題の六本木ヒルズで、本場高知のよさこい踊りを初めて見ることができました。全く、よさこい踊りは留まる所を知らない。先

日鑑賞した「釣りバカ日誌14」にも同じ踊子隊が出演していました。映画の中で「はちきん」の語源を説明していましたが、先日お聞きした高知工科大学の先生の説明とちよつとニュアンスが違っておりました。幡多地域には、「はちきん」はいないと思っておりますが、大月町にいるということは、宿毛にもいるのですね。「はちきん」でなくて「幡多美人」と呼んで欲しいものです。

おっと、話が反れました。関東支部としての同窓会の活動についてですが、年の後半は全体としての行事はありません。8月の本部総会に、宮地支部長、市川幹事長、山中副幹事長が参加しました。そして、宮地支部長は同窓会長に就任しました。支部長にはますます健康に留意され、会長として活躍いただけることと存じます。10月には、広島支部総会に、西岡常任幹事(筆山編集長)が参加しました。なお、同窓生の主な活動としては、7月のハイクの会、10月の若手の会、毎月の筆山会など活発に行われております。

関東支部役員にもいろんな

ことが起こった一年でした。HP編集長は関東支部常任幹事のまま、名古屋に栄転。関東支部HPを滞ることなく、更新してくださっています。

K顧問は、栄転で北の札幌へ「北海道支部を作る!」と張り切って出発されました。名簿委員長は高知で嫁をめでたく獲得し、会計幹事は来年よりアメリカへ留学します。

個人的には、近藤先輩が亡くなられたことが、大変悲しいことでした。かつて、いろんな飲み会で一緒に過ごしていたことを想い出し、時の流れを感じました。私が関東支部同窓会に初めて顔を出した頃で、27歳の時でした。その年近藤先輩の喜寿のお祝いが行われ、受付を手伝いに行ったはずが、結局ご馳走になっただけだった記憶があります。金婚式のお祝いも兼ねられていて、「私も今年中に結婚すれば、こういうお祝いができるのか。」と密かにあこがれたものでした。近藤先輩のことについては、他ページにて諸先輩が語られているでしょうが、ご本人を知る最後の世代として、いつまでも忘れたくないと思っています。

母校だより

学校長 池上武雄 (28 回生)

今思い出してもうんざりするような猛烈な残暑の中で二期が始まりました。

9月1日の始業式は、ガーナ共和国セントピータース高校の引率者2名、男子生徒18名の歓迎式を交えて賑やかに行われましたが、ガーナの生徒達の高知の第一印象は「暑い」というものでした。

高知滞在の10日間は、本校側は森本、浜田両教頭を中心として心からの受け入れ態勢を組みました。

まず馬路村上治室司村長(48回)のご好意で山村研修(2泊)に出かけました。本校での授業参加、クラブ交歓試合(バスケット、サッカー)、各2日間の向陽寮宿泊や本校生徒の家庭でのホームステイによる交歓、よさこい踊りの練習と「ブレ・よさこい甲子園」(全国の中・高校生等によるよさこい踊り競演会)で、来年から本格的に開催予定、今年の参加は24チーム、本校もセントピータースアンド土佐高チームとして参加、特別賞

を受賞しました。(への参加など大変盛り沢山なスケジュールを見事に消化し、日本文化吸収に彼等は意欲にあふれ元気一杯でした。

最後のサンライズホテルでの「さよならパーティー」は、踊りに参加した両校の生徒達、ホームステイ受け入れの生徒達と保護者の方々、その他数々のお世話をいただいた関係者一同がお互いの友情を深めあつて大いに盛りあがりました。この間、NHKの全国ニュースなどでこの交流振りが放送され、両校のPRができたと思います。



よさこい踊りを踊るガーナ高校生



東京大学総長 佐々木毅先生の講演

また9月5日、片山直久さん(38回、興和不動産常務)の紹介で、東京大学総長佐々木毅先生(専門は政治学)に高校生を対象として特別講演をいただきました。「若さと勉強」人材の育成とは何かを考える」と題しての講演は、勉強することの意義を「自分を耕す」と捉え、人生の中で輝く瞬間を持つことの大切さ、その為に努力を重ねることの必要性を述べられ生徒達に感動と貴重な示唆を与えていただきました。講演の終りに、来年の東大合格者は入学式のと総長室を訪ねてくるようにとのお話があり、高3生を激励していただきました。

心からお祝いを申しあげますとともに次はぜひ尾池学長にご講演をお願いしたいと考えております。



9月23日、台風の影響から2日遅れで恒例の第56回運動会が新グラウンドで開催されました。

生徒達の創意工夫と自主運営による中高一体の運動会は、自称日本一と自画自賛しているところですが、今年も6組の立派なやぐらが建ち、一生懸命の競技や、仮装ホームゲーム、活発で規律ある応援合戦など生徒達は青春を爆発させました。また県内外から大勢の保護者の皆様やご家族が応援に詰め掛けて下さって大盛況裡に無事終了することができました。

9月20日、28回生(男女共学の第一期生)による土佐高卒業50周年記念同窓会が開催されました。その際に学校創立一〇〇周年記念事業基金へと多額のご芳志を頂戴いたしました。同窓生の母校土佐高校を思う篤い心に唯々感謝申しあげます。

お礼を申しあげるのが遅くなりましたが、8月2日の同窓会総会をもって同窓会会長を宮地貫一関東支部長(21回)にお願ひ申しあげました。学校創立一〇〇周年記念事業の推進の先頭にお立ちいただくのに最も相応しいお方であるからです。

校長兼務ということで充分な働きができません申しわけなく存じながらも、同窓生の皆様の力強い後押しで短い期間でしたが勤めさせていただいたことを心から感謝申しあげます。

そして早速同窓会本部役員会から「校舎を早急に建設するように」とのご提言を頂戴しました。

9月3日、校長室で開催された会合で、現校舎の耐震性に疑問がある(現在高知工科大学にお願いして調査中)ことや、費用の確保面での優位

性(建ててからの方が募金も集めやすい、建築費、金利等も現在が有利)、生徒募集の有利さ(校舎新築により少子化が進む中でもレベルの高い生徒を確保できる)等の観点から出来るだけ早期に着手すべきとの結論に至りました。学校側としても同窓会の強力な協力体制に感謝申しあげ、貴重なご提言を実行に移すべく手続きを進める旨校長からご返事申しあげました。

最後に同窓生の皆様のご健勝、ご活躍と併せて関東支部の益々のご発展を祈念申しあげ近況報告とさせていただきます。(平成15年寒露)

本部だより

副長 北村恵美子(47回生)

関東支部の皆様、こんにちは。今年度から副会長をさせていただいてます47回生・北村恵美子です。

今お城下では衆議院選、知事選、市長選のトリプル選挙でかましい毎日です。とりわけ市長選には、土佐校OBの岡内啓明さん(42回)が出馬され、対抗馬は学芸出身の方ということで、OBは燃え

ています。この筆山が発行される頃には、ひよっとしたら、土佐校から高知市長が誕生しているかもしれませんね。さて、本年度の同窓会総会は8月2日新阪急で開催され、記念講演は講師に山崎良成(40回)さんをお迎えしました。最もトレンドイなお話(宇宙のニュートリノからバイオのニュートロン)でしたので、わかる方にはとても興味深く、私のようにチンプンカンプンの人間にとりましても、それなりに人に知ったかぶりで話せるくらいの知識を頂けたことは大変有り難いことでした。

また、盛大な承認の拍手でもって、宮地貫一大先輩が同窓会会長に就任されました。宮地会長は一日も早く新校舎設立を実現されようと多大な努力を払われています。といいますのも、今の校舎は耐震設備が不備のため、一〇〇周年を待っている間に南海大地震が来て校舎がつぶれてしまつては大変だからです。耐震設備に膨大な費用を掛けるよりも、新校舎設立に取り組む方が、あらゆる面でベターと判断されました。去る9月3日、学校、振興

会、同窓会の代表が集まり、校舎設立問題について意見交換をしました。

「最も大事なことは、土佐校の教育目標、教育方針を踏まえ、学校が目指す新しい教育内容にふさわしい教育設備とすること。学校が他校訪問や学内で討議を深め、希望するコンセプトを作成する事が先決。その為にも早期に理事会で校舎新築問題について討議し、方向性を明示する必要がある。」というところで、意見がまとまりました。この意見を踏まえて学校は検討を進めることを約束、実のある意見交換会となりました。

次に同窓会本部よりお知らせが三つほどあります。

一つは、会則の一部変更です。同窓会ホーム幹事、代表幹事は各ホームやホーム幹事の互選でしか変更が出来ない会則でしたが、全国に散らばる同窓生が幹事を互選することとは困難を極める事もありました。そこで、互選が出来ない場合は幹事・代表幹事を会長が指名出来るものとする事が、総会で承認されました。

二つ目は、各支部のみなまのお知恵を頂き検討されていました同窓会名簿のデータ

ベース化の実施段階に入っていることです。

三つ目は、来年の同窓会総会は従来の様にホテル開催でなく、ホームカミングデー的な要素を含め、恩師による授業など、案を練り、懐かしい母校での開催を検討したいと考えているということです。学校に打診しましたところ、特段の問題はないようですので、時期、内容について、今後学校と話し合いを深めて参りますので、ご期待ください。最後になりましたが、関東支部の皆様のご健勝とご活躍を祈念申し上げて、本部だよりとさせていただきます。

東海支部だより

サヴィサヴィ冬の季節
事務局長 南穀一(37回)

こじゃんとヒヨウなつてきました。関東支部の皆様こんにちは。・・・!!

平成15年は何にも良いことがなかった一年でしたネ。ジャイアンツの原さんやドラゴンズの山田さん、ホイデもって阪神の星野さん迄やめて、どんなになつチューがですかネ。盆すぎ位までは「燃えよドラ



ゴンズ」でウルサかったのですが、今はいつもの静かな白い街、名古屋にかえっております。

こんなことになるとも思わなかった春5月、筆山前号でもお知らせしましたように、東海支部総会と市商の東海校友会(同窓会)を同時・同場所開催いたしました。両校校長が今夏こそどちらかが甲子園ということで、同窓生の前でガッチリ握手までしました。市商もM徳義塾に当ることもなく玉碎……。アノ同窓会の盛り上りは一体、何だったんでしょうか。

しかし夏がダメでも来春があるさ・・・でありましたが、土佐は早々に沈没、市商は頑張って四国大会1回戦突破(平成15年11月1日現在)、

ホンマ甲子園が近づいています。同時同窓会のよしみで市商が甲子園に行けたら応援に行つチャルキ、土佐の分まで応援シチャル・・・と1人名古屋でふん張っています。ホント。

そこいらの反省とか今後のアリカタ等については、この12月の初めに東海支部忘年会を開催しますので席上、モガリ同志でモガリ合いをしたいと思ひます。

写真は昨年の忘年会のスナップです。酔たんば4人組は東海支部が誇るお医者様達です。土佐高の秀才であります。しかし、どう見てもただのオッサン連中にしか見えませんが・・・。

トホ・・・のサヴィサヴィ冬の季節です。関東支部の皆様にはお風邪など引かないように・・・。私の足腰がシャーンとしている間に甲子園で会いたいと思ひます。マッコト。

関西支部だより

なんぶ編集長

鎌田振吉(41回生)

関東支部の皆様、お元気ですか。風の便りに、関東方面

では、短い夏が終わるとともに、プロ野球も終わったと聞きました。が、世界一夏が暑い(と勝手に思っています)が)関西では、比較的、凌ぎやすい夏という印象でした。今年の関西は、何と言っても、阪神優勝に尽きます。死のロードから息切れ状態で、残念ながら日本シリーズには破れましたが、甲子園球場での驚異的な勝率は最後まで持ちこたえました。来年もこの調子でと、今から期待しております。

関西支部の年中行事は、年初の支部総会と秋の会報発行で終わりという、至って単純なものです。年2回発行の筆山に付き合うのはたいへんで、既に、今年の関西支部総会の報告は、前号で終わってしまった筈です。会報「なんぶ」の方は、只今、發送待ちの状態です。

関西支部の登録会員は約一三〇〇名、関東の三分の一の程度でしょうか。ここ数年、殆ど変化がありません。実際の関西在住者は、少なくとも一五〇〇名と推測していますが、学生を筆頭に、卒後10年以内の若者の捕捉率は極めて低調です。それでも、最近では総会に若者の姿も多く見かけるよ

うになり、総会出席率は、会員の1割程度と、関東と大差なくなってきました。

しかし、財政状態は月とスッポンです。関東支部の会費徴収の厳しさは、前事務局長の言葉の端々から窺えましたが(笑)、関西では鷹揚なものです。総会も、やれ挨拶が長すぎるの、会費が高いのと、たいへんです。このへんは実利を導ぶ関西の気風の影響もあるでしょうが、元々、関西に進学する人間が実利的であるような気がします。という訳で、関西支部の目下の課題は、日本経済と同じく、財政再建です。既に今年の総会で支部年会費の値上げ(千円↓二千円)に踏み切りましたが、支部名簿の作成と学年幹事制の強化などによる組織率の向上(登録会員数の増加)や会報での広告掲載など、具体的取り組みを進めているところです。

支部活動での悩みは、同期会との両立の難しさです。

「同期会なら出るが、総会はちょっと・・・」という意見はよく聞くとこで、色々とコネの多い関東と違い、関西ではたいへんです。そこで勢い、同期会の開催はほとんど

にして、総会の充実を図ることにならざるを得ません。この数年、関西支部では、豪華ホテルでの総会開催を行ってきましたが、それだけでは飽きがくるので、今年から、三都物語作戦に打って出ました。手始めは神戸開催でしたが、来年1月24日(土)には京都で開催されます。各学年で、総会前後にイベント等を企画して貰い、全国から同期生を集め、地元の同期生を引っ張り出そうという目論見です。

来年はイベントとして、京都幕末発見ツアーも企画中です。という訳で、関東支部の皆様は大歓迎ですので、是非、京都に遊びに来て下さい(詳しくは関西支部ホームページをごらん下さい)。

最後は宣伝になってしまいました。が、関東支部の皆様のご健勝と、益々のご発展を祈念申し上げ、支部だよりとさせていただきます。

広島支部だより

幹事 宮田賢二(33回生)

広島支部としての最大の行事である今年の総会の様子をお伝えする。今年は10月25日

に行われた。会場はこのところすっかり定着した広島市の繁華街にある広島県民文化センターである。ここから歩いて5分くらいのところに平和公園や市民球場などがある。

出席者は会員と来賓合わせて30余名と例年よりやや少なかった。とくに名誉会員であり、かつ広島支部の支柱ともいうべき竹村照雄名誉会員(20回生)が都合のため欠席されたのは残念でもあり淋しいことでもあった。そのかわり岡村前支部長が久しぶりに出席したほか、今まで出て来られなかった会員の出席があり、新しい出会いの機会となった。

会は午後4時から開かれ、最初、総会を30分ほど行い、ついで24回生の山中和正氏から「わたし流、旅の楽しみ方・世界遺産を旅して」と題する講演を1時間にわたってお聞きし、その後、午後6時から2時間余、交流懇親会が行われた。さらにその後の2次会にも多くの方々が、会員が参加され、懇親を深めた。

総会は久しぶりの校歌の斉唱からはじまり、例年のように前年度事業報告と今年度事業計画、会計報告などがあつ

た。校舎新築への同窓会としての取組みについての話が出たが、後で森本教頭のお話から別な展開があることがわかった。来年の同窓会は同じ会場と同じ時期に開催されることが報告された。

山中先輩の講演は、世界遺産を中心として旅された世界各地の写真のパワーポイントで要領よく紹介しながら行われた。その足跡の広さに驚かされるとともに、各地の思い出を昨日のように話されるのには驚き以上のものがあつた。本人は定年後に濡れ落ち葉にならないために始めた夫婦での海外旅行だと話されたが、退職金はすべて投じたことも含めて驚きと羨ましさの交じる1時間であった。世界が狭くなった印象をすら感じさせられた。

その後、会場を替えて交流懇親会が行われた。森本教頭による母校の近況報告や同窓会本部と各支部の報告や、恒例の会員によるスピーチなど盛り沢山の内容で、2時間余はあっという間に過ぎた。母校の近況報告で印象に残っているのは、校長の肝いりで強力な野球部の監督を招聘したこと、いつ起こってもおか

しくないと言われている南海地震に備えて校舎の建て替えが緊急の課題になっているとの話である。毎年のことながら土佐高同窓生の話の面白さや巧みさには感心する。それもそれを意図しているわけではないところがよい。

2次会では山中先輩の講演の続きの話や、そのほかの話で花が咲き、折角のカラオケの部屋なのに歌う人は誰もいなかった。

最後に、広島支部の活動が3人の女性役員の力に大きく依存していることを、感謝の気持ちを込めてお伝えして報告を終わりたい。

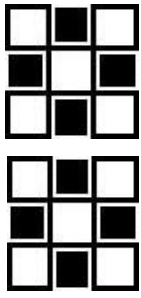
香川支部だより

事務局長 武山止人(40回生)

関東支部の皆様こんにちは。

香川支部は、会員数一八〇名余り、本部に一番近い支部です。高遠道路の整備で、故郷に帰るのも大変楽になりました。かえって故郷を遠く離れてという感覚が薄れてしまう結果になっているかもしれません。

支部の総会は、7月の第1土曜日と決めて開催していま



す。今年は、40名の参加を得て7月5日に開催しました。母校からは浜田教頭先生、本部からは安岡幹事長、貴支部からは、市川直介幹事長、山中和正副幹事長に参加していただきました。

最近の高松の話題を少し紹介いたします。

皆さんが学生時代、たぶん乗ったことのある宇高連絡船の棧橋跡地が埋め立てられて「サンポート高松」という名称で再開発中です。平成16年5月には高さ一四二米、30階建のシンボルタワービルが完成します。中四国一ののっぴりになるこのことです。連絡船で見た高松の顔が大きく変化しています。

もう一つの話題は、讃岐うどんです。安さと美味さで有名になっていますが、みなさんご賞味いただいたでしょうか。最近ではバスやタクシーを利用した「うどんツアー」が人気となっています。「はしご酒」ならず「はしごうどん」です。ぜひ一度高松においでください。

ガーナ高校生一行 受け入れ報告

教頭 森本 堯士

寮泊

4日(木)・・・中・高授業参加

化学、数学、英語(グループに分け生徒に質問して交流。盛り上がりがあった)。サッカー親善試合。

5日(金)・・・美術(日本文化と紙、工芸。折紙は日本の生徒が案外出来なかった)、茶道(目が浴衣姿の女性に釘付け)。踊り練習。(ホームステイ)

6日(土)・・・英語(ディベート。お互い準備十分で自国や高知を紹介。食べ物や将来の夢など話題が広がり楽しく交流)。空手、踊り練習。

7日(日)・・・プレよさこい甲子園出場。両校合同で80名、ガーナ民族踊りも披露、特別賞受賞。NHK全国ニュースで放映。夜サヨナラパーティ

8月25日(月)～30日(土) 成田着(代々木青年センター泊)宮地貫一さん(21年生ご紹介)、ロッチ工場見学(中田昌志さん(35年生ご紹介)、NHK見学(島田源領さん(41年生お手配)、都内高校生との交流(都立芝商業高校竹山先生ご協力)他。豊田、京都(京都国際ホテル泊)を経由バスで高知入り。(サンライズホテル泊)

31日(日)・・・礼拝、歓迎式、ホストファミリー紹介・交流。9月1日(月)・・・本校始業式参加のち桂浜、安芸経由馬路入り。(馬路温泉泊)

2日(火)・・・馬路小・中学生と交流。

3日(水)・・・馬路村出発、高知市長、知事表敬。バスケットボール親善試合(本校同陽



英語授業風景(グループ討議)

(松尾市長ほか二〇〇名)(サンライズ泊)

8日(月)・・・高知大学農学部訪問。午後離高。東京経由で9日離日。

1. 馬路村研修

「ガーナでよさこい支援会」の山口晶彦さん(35年生)が中心となって案内。

2. よさこい踊り

支援会の一員でもある、須賀タンススタジオの皆さんの全面的な協力で指導者と場所恵まれ、密度の濃いご指導をいただけて幸いでした。

本校生の踊り子は4分の3が女生徒で、それがセントピーターズ生の疲れを吹き飛ばせた一因だったようです。

3. スポーツ親善試合

バスケットボール(9/3(水)午後4時～5時)

大勢の観客生徒の見守る中、公認A級審判の下、お互いに力いっぱいプレーが続きました。結果は本校がダブルスコアで勝ち、セントピーターズの選手はこんなはずではないとの表情。でも、皆が皆バスケットの選手でもなく、交代要員も充分でない中で、随所に光るものを見せてくれました。

運動場、校舎のベランダに鈴なりの観客。前半本校は2点リードで折り返したが、後半は点の取り合いで2-2。

降雨と控え選手の不足にもかかわらず、さすがの迫上げ。

4. 向陽寮受け入れ(2泊)

食事特に問題はなく、カラ揚げもカレーも好き。ミリン干しと生卵はダメでした。ごはんにはケチャップで食べる人がいたのはショック。

彼らは超フレンドリーで寮生ともすぐ打ち解けました。ビンゴゲームも仲良く盛り上がりましたし、英語も飛び交って交流の成果を感じました。



「プレよさこい甲子園」大会の舞台上

寮生感想

◇外国人とコミュニケーションできて、自分に自信がついた。(中3)

◇彼らがいた間は寮に活気があった。思ったより彼らの言うことも自分の言いたいことも通じた。

◇国際交流は難しい。今回のガーナ生の来校は成功したとは思えない。しかし、壁を乗り越える方法はたくさんあるはずだ。失敗から成功は生まれる。(高1)

◇英語に対する見方が変わった。今まで「勉強しないといけない科目」という認識だけだったけど「言葉」を学んでいるのだと実感した。(高2)

◇自分の英語力の乏しさを実感した。学習意欲が高まったと考えれば「プラス」かな。

何人かの仲良くなった生徒とeメールアドレスを交換した。

ドミトリステイが終わっても距離を越えた交流が続けられて嬉しく思う。3月の「世界子ども水フォーラム」にガーナ代表は来ていなかったの、これを機会に水環境についての情報交換網をガーナにも広げたい。(高3)

5. ホームステイ(2泊)
中2〜高3生まで幅広い家

庭にそれぞれ1名をお願いすることにしました。

名前も人数も現地出発2日前まで確定しないという情報不足の中、私が「日本の終戦直後よりもっと貧しいくらしい生活振りです」などと申し

ましたが、実際来校した生徒達は「ガーナのおぼっちゃま(引率のレノア神父の言葉)」でしたので、何かと戸惑いの連続だったようです。誠にすみませんでした。それにしても、準備の段階からほんとに

献身的と言っても過言ではない協力がありがとうございました。そして、ほとんどのご家庭から「ホストファミリーをしてよかった」とのお声をいただき涙が出るほど嬉しかったです。心から感謝とお礼を申し上げます。

ホストファミリー感想
◇好き嫌いが多くいうで家での食事に困った。ほとんど彼から話すことはなく、機械物にしか興味を示さなかった。(中3家庭)

◇我が家は長男が障害を持っていますので、誤解されないよう説明を致しました。とても長男にも優しく接してくれてありがたく思いました。心配りのできる頭の良い方だと

思いました。B君(7月から医学部に進学予定)に会えて息子が少しだけ成長した気がします。彼の頑張りや優しさは心に強く残りました。

B君に良い思い出を持って帰ってもらいたいと、家中で努力したり、協力したり、心を丸くして笑顔で接したり。心がかよいあえることの素晴らしさを充分いただきました。今後もメールで交流できればと願っております。(中3家庭)

◇今まで名前しか知らなかった国を家族で身近に感じる事ができました。また、親としては日常ふれることの少なかった我が子の違った面を見ることができたことは良かったです。また子供がホームステイをさせていた場合の注意点も逆の立場で考えられたことも良かったと思っています。(高1家庭)

◇この夏の一大イベントで家族のきずなが深まった。英語や社会学習へのモチベーションが高まった。特に中1の息子にはよい刺激になったと思う。

まじめで紳士的であり見習う点が多かった。経済的に恵まれた家庭の子弟であるよう

に思えた。

お土産について(つまらないことで済みましたが)「高価なものはないように」といしながら、ある家庭では高価なものを買ったというような情報があり、困惑した。そのようなことで彼らの間にも嫌な感じが広がったであろうし……。(高1家庭)

◇一番良かったと思うことは我が子の口から「英語をもっと勉強していっぱい話ができるようになる」と言う言葉が聞けたこと。我が子の繋ができてないことや、気がつかない当たり前の生活も顧みることができました。

S君は挨拶、手伝い、マナー、気遣い、優しさ、笑顔、紳士的な態度など、それに「ありがとう」の言葉を決して忘れないところはほんとにすばらしかったです。(高1家庭)

◇私達が、英語はできませんが、それなりに心で通じるものは世界共通であることもわかりました。人種によってなどという偏見は全くなくなりました。(高2家庭)

6. おわりに
最初のお話は、学校現場の事情をほとんど考慮してもらえていないかのような印象で、

まさに驚きからの出発でした。それを「ガーナでよきこい支援会」(会長 貞谷俊夫先生、幹事 中田昌志さん)が受け入れ母体となって全体をプロデュースすること、その中で学校が受け入れる部分を土佐高が分担する、との体制に整えていただいてから事が急速に進展しました。校内的には何といっても、池上校長先生の当初からの物心両面での全面的な支持・支援があったからこそ事です。

全てが手ざりでしたから、充分なことができたなどとは思っておりませんが、セントピーターズの一行為、大変いい顔で過してくれました、いい顔で帰ってくれましたので、なんとか「大使の顔をつぶさない(校長先生に繰返し言われました)程度にはできたかな」とほっとしています。

校内の教職員の中にも温度差はありますし、生徒の感想の中にも「成功は失敗から生まれる」となぐさめてくれたものもあります。寮を含めて教職員の皆さんは勿論、外部から指導に来てくださった方々、中高の全生徒諸君、皆さんほんとうにご協力をあり

がとうございました。お陰様でみんなが貴重な経験をする
ことができました。きつと次
へ生かせるものをみんなが持
てました。

考えてみますと、いわば大
使ご自身のお墨付きメンバー
の初訪日であった訳です。こ
んなチャンスにいただけたこ
と自体が大変幸いなことでし
た。私学の、それも進学校と
いわれるところが、もっともっ
と充実させていかねばならな
い分野の一つに国際交流があ
ると考えています。その意味
でも、私達の今後につながる
大きな成果でした。今回のこ
のプログラムに関係して下さ
った皆様に、心から感謝申し上
げて報告とさせていただきます。
以上

馬路村訪問

支援会 山口 晶彦

9月1日快晴。みんな覚え
たての日本語で、「暑い！暑
い！」。安芸では先ず岩崎弥
太郎邸、続いて壺江まほさん
(TICA派遣教師としてガ

ナ滞在歴あり。安芸農業改良
普及センター勤務) お手配に
より茄子栽培ハウスへ。1本
の苗から数百個収穫、年収何
百万円などにびっくり。若
荷栽培ハウスでも説明に熱心
に耳を傾け、質問も出る
(「へビは出ないの?」も)。

5時過ぎ宿泊所の馬路温泉
に到着。役場前の広場は村民
総出と思われる程の人で、ガ
ナ国旗と日の丸の小旗の波。
みんなの見守る中、ポール
にガナ国旗・日の丸・馬路
村旗を順次掲揚。上治村長
(48回生)の英語での歓迎ス
ピーチに高校生みんな感激。
夕食は心づくしの野菜テン
プラ・ヤマメの塩焼き・こん
にゃくの刺身等々。ただ彼ら
には苦手の様子で食が進まず
明日はチャーハンに決定。

翌9月2日は、馬路小学・
中学に分れて交流会。歌の紹
介、餅つき等。お餅はなかなか
好評。

マイケル君の入院(体調不
良で大使夫君が高知に連れ帰
る)を聞き心配された小学・
中学校長、保険担当の先生に
マリリヤは風邪みたいなのも
で(心配)無用と説明(壺江
さんの同行で大助かり)。
昼食後木工場 柚子ポン工

場へ。間伐材からつくられる
トレイ、またコンベアーから
くり出される瓶詰めは、その
使用大型機械と共に馬路村の
活気を感じさせるものあり。

「馬路精神を耳にタコが出来
る程たたき込んでね」という
大使要請?の結果如何。

この日も暑く、村内散策を
宿所での休憩に変更。元気な
数人は前の河原で水遊び。柚
子工場のジューズ差し入れは、
天の恵みでした。休憩が効を
奏し、夕食のチャーハンはお
代わりの続出。ご飯を追加し
て炊く等炊事担当のおぼさん
には、大分ご迷惑をかけまし
た。皆さんにこにこ対応して
頂き、感謝!感謝!温泉風呂
では、潜って泳いだり楽しん
でおりました。

3日朝は、早朝にもかかわらず小・中学生、従業員の方々、
村長さんの見送りを受けみん
な感激。帰路も順調にて市長
表敬、知事表敬につなぐこと
が出来ました。

後記:マイケル君・マリリ
ヤとは全く関係なく、虫歯と
暑さと疲労で発熱との見立て
で市民病院ではお世話になりま
した。以上

(文章編集:支援会
公文敏雄 35回生)

ガーナ高校生の感想文

"I really met many good Japanese people and love them. I learned many things from them. Japanese are hard working, time conscious and very kind to foreigners. Japanese I observed also love their country. They do everything possible to promote progress and development in all areas of life. I will always remember Japan especially the students of Tosa High School, Umaji Village, and those we met in Tokyo."

"I am one of the fortunate students of St. Peter's to visit the very beautiful country. I thank Ambassador Asai and all those who made the trip enjoyable for me. I still remember the warmth of the Japanese students. The experience was wonderful. I sit back and remember Tokyo, Kyoto, Kochi cities and especially all the students I met. Please come and visit us in Ghana. "

"My trip to Japan has had so much impact in my life. I had the opportunity of seeing wonderful things, including its technology, and interacting with people outside Africa. People are time conscious, or everybody seems to be busy about his work. Japanese, especially the people of Kochi, are very friendly and also had respect for each person. The knowledge I have acquired would be used to educate the people of Nsawam Adoagyiri where I come from."

近藤久寿治さん逝く

92歳 関東支部育て半世紀

同窓会関東支部の生みの親と言われる、6回生の近藤久寿治さんが、8月26日転移性肺がんのため亡くなった。享年92歳だった。

29、30日の両日、通夜、告別式が文京区の寂圓寺で執り行われ、四〇〇人余が近藤さんとの別れを惜しんだ。告別式では元文部事務次官で同窓会関東支部長（本部奥会長兼任）の宮地貫一氏（21回）が、同窓を代表して弔辞を捧げた。

近藤さんの横顔

近藤さんは明治44年香美郡赤岡町生まれ。昭和11年東大独文科卒業後、出版活動の傍ら東京に進学した土佐中の後輩との交流を深め、戦中、戦後の物資のない時代に多くの後輩たちが近藤さんを頼って集った。



昭和25年教育図書同窓会創立、昭和50年から5年間請われて書評紙「図書新聞」の社長を兼務、同紙の再建を果たした。

半世紀以上にわたって献身的に同窓会事務局を引き受け、母校と同窓会をこよなく愛し続けた。9年前に愛妻初甲夫人に先立たれてからは好きなお酒と読書、観世流謡曲の趣味を楽しんでいたが、数年前から体調を崩して入退院を繰り返していた。

本紙3号（86年）に「同窓会章創期のころ」を語った近藤さんの記事がある。また続・続「南風対談」（高知新聞社刊86年）で著者山田一郎氏は、近藤さんと対談、その温厚誠実な人柄と幅広い交友録を浮き彫りにしている。

弔辞

宮地 貫一
（21回生）



土佐中学の大先輩である近藤久寿治様がこの度ご逝去になられました。明治生まれの気骨のある先輩が、またお一人この世を去られましたことは、誠に痛恨の極みであり、寂寞の情に耐えないものを覚えます。

ご本人は、近年、体調を崩されていたと伺っておりまして、このところ、お目に掛かっておりませんでした。過去も、幾度か入院されては、奇跡的に快復されるという気力、生命力の持主でありまし

ただけに、誠に残念でなりません。また、近藤様ご一家にとりましては、大黒柱とも云うべき父君を亡くされたお悲しみは、いかばかりかと、心からお悔やみ申し上げます。

本日、ご参列の皆様方も御承知のとおり、近藤様の生涯は、「同窓社」という教育図書、ドイツ語関係の出版社を興して事業を進められ、そのことにすべてを捧げられたものであります。戦前の十年を加えれば、六十余年に亘って、この道一筋に歩み続けて来られた方です。幾度か経営的には、苦しい時代もあったことは存じますが、その都度、今は亡き初甲（はつち）夫人と二人三脚で危機を乗り越えられて今日の「同窓社」を築き上げて来られたのであります。世間の目から見れば、とかく派手な事業と映りやすい出版界にあって、教育図書としてドイツ語出版という地道な世界をひたすらに歩み続けて来られたのであります。世の中の変化の激しい現代、そして都市化社会の中に埋没して、何か忘れ去られてしまった大切なものが、ここには息づいているとでも申

せましようか。この直向きな生き様こそ、近藤様自身の人格そのものであり、お人柄を示すものといえましよう。

そして、このような近藤様のお人柄が偲はれるものとしては、郷里土佐をこよなく愛しそしてまた誇りとしてきた土佐人気質であり、また母校愛に溢れた後輩への愛情などが思い浮かんで参ります。

個人的な思い出になります。私が昭和23年の春に高知から上京して以来のことでありまして、その間五十余年、半世紀を越える年月が流れ、あたかも走馬灯の如くに思い起こされるのでございますが、お元気な姿で酒を酌み交わしました最後は、2年前の平成13年5月のことでした。近藤様の卒寿のお祝いの会合が御自宅で催され、曾和さん、岡崎君、野波君、小生と同窓社の方々と共に内輪の集まりがありました。多少、言葉に呂律の回らないところもありましたが、いつもの温顔で、楽しい一時を持つことができました。心の奥底から酒―それも日本酒―を慈しまれるその姿は、酒仙という言葉そのものにふさわしいものといえましよう。

う。

酒に係わる想い出をあと一つ付け加えさせていただきですが、随分昔のことで、日時の記憶もさだかではありませんが、近藤様の旧制高知高校以来の御学友でドイツ文学者の高橋義孝先生（故人）のお宅に小生もお供をしてお邪魔いたしましたことがあります。その時のお二人の酒を酌み交わされる御様子は、李白の詩の世界を彷彿とさせる朋輩ぶりに感銘を受けたことでした。

また、私が大学を出て当時の文部省に就職するかどうか思い煩っていたときのことですが、「自分の進むべき道は、自分で決心しろ。」と諭されたことも、人生の一里塚に立ってのアドバイスをもたらったと思っております。

近藤御夫妻にお世話になった後輩諸兄は、全く枚挙にいとまがありません。

五十年の歳月が流れて、今日、同郷社も御子息、孝夫君が大地に根を張って、しっかりと育っております。また、後輩たちもそれぞれの道に向かって歩んでおります。

近藤先輩のまかれた種は、しっかりと根付き、大空に向って伸びて行っております。

どうか心安らかにお休みください。

そして奥様とともに天国にあって比翼の鳥となり、同郷社、母校十佐中高、そして私共後輩の行く末を見守ってください。ようお祈りいたしまして、お別れの言葉とさせていただきます。



近藤さん安らかに後輩たちからの追悼文（順不同）

追悼文

泉谷良彦（29回）

近藤先輩は何時も輪の真ん中におられた。座を和ませ悠

然と日本酒を嗜まれるお姿は仙人の風情であった。存在感のある先輩がまた一人逝かれた。

我々の時代、同窓会は組織化されておらず、口伝で連絡が入り三々五々集まる。東大の植物園の木の下に莫産を敷き、食べ物も駅弁。酒だけは充分あった。その中に変わらぬ仙人近藤さんが居られて「オマン、ヤリヤ」と・・・。

その後同窓会関東支部が、近藤さんを中心とする先輩諸氏の御尽力により隆盛を見て

いることは周知の通りである。独和辞典を発行された同郷社のビルを新築、その完成披露の席上、奥様と満面の笑みを浮かべておられたお姿が思い出される。どうぞ心ゆくまでお酒を楽しまれながら我々の行く末を見守って下さい。

合掌



青空の下笑顔

堀見淳二（42回）

私が飯田橋で勤務していた頃、近藤先輩の同郷社はすぐ近くにあった。近藤先輩はそれ迄同窓会やその他会合でよくお見かけしていたが、親しくお話しする機会はなかった。

私の勤務先の会社がホテルをオープンした。私は先輩に真っ先に行ってもらいたかった。諸先輩の話によると、土佐高同窓会の発足当初より皆お世話になっていたし、そのお人柄は本当に尊敬出来るものであった。

岩村先輩と打合せをして、奥様とお二人でおいでになる事が決まった。淡島ホテルは船でホテル迄入る事になっている。私は陸側でお出迎えした。ご夫婦がニコニコして車から降りられた。抜けるような青空の下、本当に楽しそうであった。先輩に喜んでいただける事がうれしかった。一緒にボートに乗ってホテル迄お送りする時、先輩は「堀見君、今日は思いっきり一杯やろう」と言われた。私共はホテルの玄関迄お見送り、申までは御一緒できない事になっていた。「御一緒出来なくて

申し訳ありません。」と言った時の先輩の寂しそうなお顔は本当に残念そうであった。海と船と青空の下での先輩ご夫婦の笑顔は忘れられない思い出である。ご夫婦でどれ位のお酒を飲まれたか、今は知るすべもない。

酒と謡を教えられ

野波博泰（26回）

近藤さんには昭和26年の春以来終生お世話になった。それは先輩・後輩という間柄を些かハミダシタものだった。

東大の入試が終わった夜、我々は岡崎さんに連れられて大泉学園の近藤邸を訪ねた。そこで初めて酒を飲んだ私は、自分が意外と飲めることを知った。私が後年大酒飲みになった元凶は、近藤さんと岡崎さんにある。

近藤さん宅には東大グループが集まった。「まんじゅう会」と称しているくせに、酒



パツカリ呑み、麻雀をうち、定って「もりそば」を食った。尤も、遊んでばかりいた訳ではない。伴さんは司法試験と外交官試験に、北村さんも外交官試験に受かり、ともに外務省に入ったが、惜しいことに二人とも志半ばで逝れた。

近藤さんは毎年定期的に全国の大学を廻っておられた。私が日本水産(株)広島支社の事務課長の頃、近藤さんが広島大学を訪ねてみえられた。その晩は広大のドイツ語の先生方とともに流川・葉研堀界限を呑み歩いてフラフラになった。

後年、私は妻に先きだたれ、職を辞した時、亡き妻と娘達への想い出に「平生記」を綴った。近藤さんはそれを校閲し、製本してくれた。おそらく近藤さんにも、亡き初甲夫人のことが想はれていたことであろう。

私は近藤さんの謠の最後の弟子である。先年亡くなられた兄弟子である島内さんからも「謠に精進しなさい。新しい世界が拓けます」と励まされ、「観世流初心謠本」の上巻の「鶴亀」から中巻の「羽衣」までいったところで、私がかん臓病で入院し、近藤さん

も体調をくずされ、そこから先は無期延期になったまま終わった。

最後にお目にかかったのは、7月17日に岡崎さんと二人で木村病院に見舞った時である。酸素マスクをして眼は開いていたが意識はもうなかった。

近藤さんの思い出

吉澤信一(16回)

初めてお目にかかったのは、多分私が小学校の3、4年生の頃だったと思います。私の父(明治30年生れ)も母も、近藤さんを敬愛していました。旧制高知高等学校生の頃、東大生の頃、制服姿で時折拙宅に見え、まだ幼少の私の妹や弟も含め、皆で話し相手になってもらったこともあります。

私が土佐中に入學した頃、近藤さんから英国の著名な作家のディッケンズ(Dickens)の厚装紙の英語本を贈られました。私に勉強せよということでした。その後私が東大を受験する頃から、当時の茗荷谷の御自宅で随分とお世話になりました。

郷里を愛され、赤岡の夜祭りに連れて行ってもらい、絵金の作品を種々語って下さいました。晩年まで、赤岡の小

学校時代の残り少ない友だちと時折会合されていると、にこやかに話しておられました。近藤さんのお人柄が偲ばれます。

父を失ったような寂しさ

山中和正(24回)

私が近藤先輩に初めてお目にかかったのは、昭和25年ごろでした。その頃、私は高知から上京し東京の大学に入學したばかりでした。当時はまだ食糧事情が悪く、いつもお腹をすかせて欲求不満でした。先輩はそんな私を見透かしたように、「腹が減っているのなら、うちへ飯を食いに来い」と言ってお下さいました。

私はお言葉に甘えて、他の同窓生と一緒に大泉学園のお宅にお邪魔しました。一度ならず数度うかがい、貴重品の白米を、馳走になりました。私ははじめは『奇特な先輩だ』位にしか思いませんでした。しかし、回を重ねてお話もうかがっているうちに、先輩の『後輩を育成する信念』が伝わって来ました。

爾來五十有余年、先輩の志を継承して私なりの微力を尽くしてきたつもりです。今回

先輩の訃報に接して、温かい親を失ったような寂しさを感じました。

安らかにお休み下さい。

合掌

近藤先輩と甲子園

浅井伴泰(30回)

近藤先輩に初めてお会いしたのは、大学入學の年のこじんまりした同窓会だったが、当時から世話役を一手に引き受けられていた。その後お会いする機会が増え半世紀近くにわたってご指導頂いた。

18年前関東支部が組織化された時、私に幹事長をやれと言われたので、つぎ初代支部長になられると思っていたら、自分は表に出られなかった。しかし引き続き事務局を会社に残り置いて下さり、同社の岩村さん(41回)を準専任？にして下さった。後年、鶴和さん(41回)の所に移るまで長い間、同社にお世話になった。

先輩の献身的な母校愛がなければ今日の関東支部の充実は無かっただろう。座敷で日本酒をじっくり飲むのがお好きでサンケイホールでの同窓会では窪田さん(38回)がリクエストに応じてホールに50

畳程の畳を敷いた。

母校の甲子園出場を楽しみにされ、曾我部校長と並んでスタンドで応援された思い出話をよく伺った。14年ぶり出場の89年夏にも甲子園に乗り込まれた。惜敗の夜一緒に一緒に、筆山9号の表紙に「14年目の甲子園」の題で寄稿され、最後に「その晩梅田で深酒した」と結ばれている。

合掌

ありがとうといえ ました

溝渕 真清(32回)

「おまんくは、高知の何処ぞよ」「ちくくと、手伝うてくれんかよ」「皆んな頑張りゆうのう、こうやって皆んなあで頑張ったらええ」「早よう、会館つくってくれんかのう」

近藤さんから直接かけていただいた言葉は、いずれも短いものであったけれど、その声は私の心に焼きついている。



お近づきさせて頂いたのは、関東支部を立ち上げられてからの後年期の先輩でしたが、威厳にみちた凄い人として、心のやさしい大先輩として尊敬させていただいた。

若い時期から、先輩、同窓生が少なく私学である土佐中は自分達が引っ張り、育てなきゃなんのだ、という気概を常に持ち続けられ、ご尽力された方であつたと思う。

妻を愛し、ドイツ語を愛し、酒を愛し、「わしゃあ、土佐中が好きじゃきに」と土佐中のことを、後輩のことを愛してくださった近藤さん、本当に有難うございました。

不出来な後輩ですが、近藤さんの情熱の一滴でも受け継がせていただきたく思います。

優しくも毅然として 同窓会を育んだ先輩

鶴和千秋(41回)

この夏近藤先輩が逝かれた。戒名「独尊・夢寿量居士」。土佐中高同窓会そのものと言っても過言ではない先輩だった。戦後の物不足、食糧難の時代、上京する後輩を集めては物心両面での援助を続けられた。近藤さんを父と仰ぎ、先年亡くなられた奥様を母と慕う同

窓生数知れずと聞く。

母校を愛し、同窓生を慈しみ、同窓会関東支部を興し、事務局を引き受けられ、今日の関東支部隆盛の礎を築かれた。母校の現状を憂うる声喧しい時も、決して声高にあげつらうことなく、物静かにしかし真剣に母校の将来を案じておられた。

平成5年、墨輩が事務局長を拝命した折、居並ぶ諸先輩方は有無を言わさぬ表情で、まるで東映時代劇の悪家老、悪代官が如き形相に見えた。この時も近藤さんは物静かに端座しておられるのみだった。しかし遠くを見つめるようなその眼差しは「スマンのう、引き受けてくれんかのう」と優しくしかし毅然として語りかけておられた。「この先輩の育んできた同窓会を絶やしたらいかん」己の分を超えた役目を思わずその場で請けしてしまった。赤坂「土佐」でのあの日の光景が昨日のように思い出される。そう言えば同窓生が随分世話になった「土佐」のマスター小原さんも今年に亡くなられた。

昨年来、同窓会草創の頃の諸先輩が相次いで身まかられた。近藤先輩もその後を追わ

れ、一つの時代が過ぎ去ろうとするのを感じる。しかし次代を担う同窓会の若い世代の沸々たる息吹をも同時に感じ取ることが出来る。近藤さんをはじめとする諸先輩の遺徳をそこに見る。合掌。

えんじのマフラー

岩村康生(41回)

昭和50年は近藤さんにとって大変な年だった。社運をかけて出版した『新修ドイツ語辞典』がようやく軌道にのり始めたとはいえ、油断できない地固めの時だった。そんな時、書評紙『図書新聞』の社長にとの要請が出版界の重鎮たちから近藤さんに持ち込まれていたのである。図書新聞は経営難から創立者が自死、廃刊の危機に直面していた。



持ち前の男気で図書新聞社長の兼務を決断した近藤さんはただちに『古書店地図帖』を出版した。神田神保町界隈の古本屋MAPである。いまでもこそ、グルメMAPなど沢山あるが当時としては珍しい企画で、よく売れたと聞く。本体の新聞の方は週刊で、毎週水曜が印刷日だった。芝の新聞印刷所に近藤さんに連れられて出かけた。図書新聞スタッフの手伝いをして最終の校正ゲラを校了にして、工場に渡す。刷り上がりを見届けてから皆で一升瓶を開んで飲む。この瞬間、近藤さんはえびす様のような柔和な顔になっていた。

5年間である。この長きにわたって毎週1度図書新聞に顔を出しては大酒を飲む。出かける近藤さんの顔は生き生きとして楽しげに見えたが、内情は無給の上の持ち出しであつたに違いない。

再建を果たして退く時に、スタッフから贈られた感謝の品がえんじのマフラーだった。「これがわしの報酬よ。ちっくと派手じゃがのう」と嬉しそうに大切に身につけていた。

「まんじゅう会」のことなど

岡崎昌生(23回)

五十年あまり前、笈を負ってきたかどうかさだかではないが、敗戦後、まだ衣食住の十分でなかったころ「外食券」なる紙片だけはしっかりと持って、東京に出てきた。

春4月、先輩につれられて、小石川・茗荷谷の同学社をたずね、近藤さんにはじめてお目にかかった。

当時、土佐中・高同窓会関東支部の支部長は片岡義信さん(1回生)。当時、旧国鉄の職員局長。頭が禿げ上がりが相当のオジさんに見えたが、まだ43歳であつたが、実質的には近藤さんを中心にまわっていた。というのも、同窓には転勤の多いサラリーマンがほとんどだったが、近藤さんはヨーマンリーとして独立百貨、東京に定着していた。

そこで、総会など行事の下働きとして学生幹事が相繼いでサポートしていく。理科系は実験などで忙しいということで、比較的に時間の自由に使える文科系の学生がこれにあたるというならわしになっていた。

親分は近藤さんとして、島

内淳さん(16回)、曾和純一さん(16回)、伴正一さん(17回)、光森正さん(20回)、宮地貫一さん(21回)、北村正志さん(22回)、そして私(23回)、野波博泰さん(26回)、山村泰造さん(26回)と学生幹事が続いた。

近藤さんは当時、練馬区東大泉九一八番地に住んでおられた。朝霞にあった旧帝國陸軍の将校宿舎の払い下げとかで、家も庭も広く、六畳一間に2人の下宿住まいの私からみるとまさに別天地の感じがした。

近藤さんのお言葉に甘えて、学生幹事は同窓会の打ち合わせなど何かにつけて、友達も誘ってお邪魔し、オバサン手造りの料理やお酒をいただいたものであった。

ちょうどその頃、同じ東大泉のすぐ近くに島内さん(九四六番地)、伴さん(九四一番地)が住んでおられ、これから三つのお宅のどこかで集ることが多くなった。

伴さんか宮地さんか、ただ集ってもしょうがない、何か国のこと世の中のことなどの話をしようじゃないか、そのためには何かハラの足しになるものが必要、当時、秋葉

原に1個5円(もりそば15円前後の時代)のマンジューがある、これを頼張りながら駄弁ろうじゃないかということとなった。これが「まんじゅう会」の名前の由来かと思う。「まんじゅう会」は規約もなければ出入りも自由、同窓だれでも加わることができた。まさにドイツ民謡の如く自然発生的なもので、ほのぼのとしたなんとなく心温まる集いであった。

とまれ、マンジュー自体はほんの1、2回で醗酵し、永續しなかったが、「酒」となった「まんじゅう会」は、メンバーの転勤、転居などのお祝い、送別、歓迎の宴と事に応じて集まり、半世紀あまり続いてきた。

昭和の御代には皆元氣であったが、平成に入り、北村さん(平成2年)、山村さん(同6年)、光森さん(同9年)、島内さん(同11年)、伴さん(同13年)、そしてこのほど不死身の近藤さんもついに鬼籍に入られた。謹んで御冥福をお祈りする次第です。

しかし、「まんじゅう会」は当初メンバーの曾和、宮地、岡崎、野波4名がまだ健在、これからも続いている。



四十九日法要でビデオ放映

10月12日、龍閑寺で近藤さんの四十九日の法要が行われた。納骨の後上野「伊豆菜」にて会食。席上、お元氣な頃の近藤さんの姿がビデオで放映された。出席者は1時間あまりビデオを食い入るように見つめ、語り合って故人を偲んだ。

「この顔」「あの顔」の中に...

西山昭雄
重陽やきょう何となき

祝いごと 久寿治

人びとには、人生の中で様々な偶然があるのかとは思いますが、「ご主人が喜寿で、奥様が古希で、金婚の年を迎えられる」というのは、これはもう「何となき」というには、

あまりにも幸せな偶然という気がします。

昭和24年頃は、ほんとうに毎日の食糧にも不自由な時代でした。にもかかわらず、近藤家の夕食時は、いつも、多士済済な方々どなたかが見えて、笑顔の酒を酌み交わしていました。これを、土佐中・高校の同窓会では、「近藤塾」と呼んでいたそうですが、私は「水漬伝の梁山泊も、かくや」としみじみ思ったことでした。

昭和63年9月9日、東京の芝ランドプラザで、土佐中・高校同窓会の主催で「近藤さんの喜寿と金婚を祝う会」が開かれると聞いた時、私はかつて「梁山泊」に集っていた方々の「今の姿」を含めて、近藤さんご夫妻の「満足感」をぜひ記録したいと思いました。



めでたしと 重陽の日を

えらばれし 久寿治

「近藤さんの喜寿と金婚を祝う会」(実は、この表題には、奥様(初甲さん)の「古希」の文字が脱落しています)で、おふたりの胸の中にじっと押さえつけられている「満足感」を、このビデオから読み取っていただければ、これに過ぎることはありません。

【編集部注】西山昭雄さんの奥様は28回生の旧姓南全子さん、ご実弟は27回生の徳雄さん。編集部は特別にお願いしてビデオ制作の西山さんにご寄稿を願った。」

故弘瀬さん一年祭

昨年の9月に亡くなった37回生弘瀬孝昭さんの一年祭と偲ぶ会が9月13日に行われました。青葉台の自宅に同窓生はじめ30数名が集まって遺影に手を合わせたあと、近くの寿司屋で「偲ぶ会」となりました。

残暑というよりも真夏の暑さでこし2番目の気温を記録。冷房の効いた部屋でビールや冷酒、ワインなど飲んで故人を偲びました。

井上健郎氏 38 回生 作陶展

9月18日から23日まで伊勢丹府中店で井上健郎氏(38回生)の作陶展が開かれました。編集部から記者夫婦がおっ取り刀で駆けつけ、同窓生のよしみで図々しく忙しい井上さんにお話を伺って来ました。

今回の出展作品は美濃の自陶房「舟伏窯」で焼いた織部と山梨の友人の「増穂登り窯」の穴窯で4日間焚いた焼締(信楽)のそれぞれ数々の作品が展示されていました。記者の独断的感想を許されるならば、氏の作品には、普通の織部の緑釉陶器の重苦しい感じもなく、その造形とあいまって軽快に仕上がっている感じがしました。焼締陶も大小種々の造形とあいまってそれぞれ異なった火色・土色が鮮やかに出ており、美しい作品に仕上がっていました。また、藁灰釉をかけ、色合いが少し志野に似た独特の作品も展示されていました。土も色などころの土を使っているようで、郷里窪川の土も使っているそうです。郷里窪川にも陶房があるそうです。



あるそうです。

窪川町生まれの井上さんは土佐高卒後、「家業が写真屋だった」せいもあり東京写真大学(現東京工芸大学)に進み、卒業後フリーで映画製作の仕事をしていましたが、父上の病気を機に映画の仕事はやめ、40歳で陶芸の道を志し、東京で作陶を始めたが、42歳で愛知県窯業職業訓練校に入塾し本格的に作陶の勉強を始められたそうです。「私の最終学歴は職業訓練校です」とご本人は笑っておられました。子供の頃から手で物を作ることと絵を描く事が大好きで、絵は自分でも相当うまいと思っていたが「土佐校時代絵がものすごくうまい上に成績が良くて東大へゆくような奴がいたので、絵とはしばらく離れていた」そうです。



られます。現在は織部を主として焼締陶(信楽)、黄瀬戸を作っておられます。

「土の塊から、轆轤を使って、あるいは紐づくりで、かたちをつくる、この仕事が好きです」

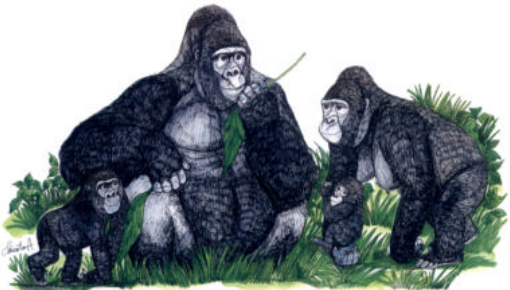
東京における個展も折々開催されており、関東地区の同窓生多数の来観を記者は願っています。

〔西岡恒憲(41回)〕

舟伏窯 井上健郎
〒五〇一・一三三〇一 岐阜県
山県市神崎一六四一
(〇五八二) 五四二・四六九

ゴリラ・ゴリラぜんぶ
ゴリラ展をたずねて

ゴリラばかり描き続けて18年。51回生の阿部知曉さんの個展が10月上旬、埼玉県越谷市の蒲生で開かれた。



阿部知曉さんと筆者

多々あるらしい。そんな時は見えなくても、遠くから聞こえる鳴き声や彼らの匂いをもとに、五感で感じて描く。

どうしてゴリラがそんなに好きなの?

よくそう聞かれます。これを他人に説明するのはとても難しい。でも、あの頑固そうでこわもてのゴリラが、たくさんの人の中から私を見つけて、笑いかけてくれるとき、「うーん、たまらない」そう思ってしまう私なのです。(「ゴリラを描きたくて」世界のゴリラを訪ねて)ポプラ社より)

阿部さんがゴリラの話をしている時、ゴリラを我が子のように思う深い愛情を感じる。だからこそ人間が引き起こす森林破壊、赤ちゃんゴリラの密猟に警笛を鳴らす。

最後に読者へのメッセージをお願したところこのようなたえが帰ってきた。「皆さんは高知の素晴らしい自然の中で育ってきたと思います。だからこそ人一倍自然の有難さ、良さを理解できるはずで、今、身の回りに起きていることに対して向き合ってください。」

〔山崎寛子(76回)〕



剣友大西正一郎君との47年振りの再会



28回生の大西正一郎君は、私の土佐中、土佐高はもとより、京大法学部、京大剣道部の一年後輩であり、共に京大剣友会員である。

私が中学2年生の時、一年後輩に一際背の高い色白の好男子がいた。お祖父さんは弁護士で高知県議会議長、衆議院議員をした偉い人で、お父さんも東大出の弁護士さんだということだったが、それが大西君であった。

当時私の家は、警察官の父の関係で高知市越前町の県警幹部宿舎の一角にあり、家を出て路地を通って表通りに出ると、右角に大邸宅があり、その立派な門に大西正幹という表札がかかっていたが、それが大西君のお祖父さんの屋敷だった。大西君は、良くでき、土佐高生全体で行う模擬試験でもいつも上位に名前を連ねていたが、高校時代は、ついで親しく口を聞くといいことは無かった。

大学2年になった時、母校土佐高から続々京大に後輩が入学してきた。その中に、私と同じ学部に入ってきた大西君がいた。大学構内を歩いていたら、偶然向うから歩いてくる大西君と出会った。お互いにそれまで口を聞いたこともなかったのに、目と目が合った途端互いに笑顔で近づき、挨拶を交わした。その際は予定はしていなかったことだが、咄嗟に何か運動部に入る予定があるかどうか聞いてみた。ないというので剣道部に誘ってみた。前年の昭和27年サンフランシスコ講話条約が発効し日本は独立を取り戻し、敗戦後禁止されていた学生剣道も解禁となり、その年に入学・入部した私は、先輩達と共に学生剣道復活、京大剣道部再建に意欲を燃やしている時であった。大西君は、若干躊躇しているようであったがとにかく道場を見学だけはしてくれることになった。これが大西君とほぼ3年間剣道で共に汗を流し、剣友として交わる切っ掛けとなった。

剣道部に入部する者は、30人位から50人位いたが、卒業時まで残る者は一学年3人ないし5人位に過ぎず、私の

学年は3人、大西君らの学年は4、5人であった。

大西君は、私も同じであるが、剣道部に入るまでは、剣道の経験はなかった。したがって、当初は一年早く始めた私の方が強いことは当然で、背の高い彼の面や小手を打っていい気になっていたが、そのうち彼はめきめきと上達し、そう簡単には打ち込めなくなっ

ていった。そればかりか、背の高い彼の面打ちには手を焼いた。しかもその面打ち振りが、剣道部に入るまでは、振りがぶつて上段から振り下ろす面ではなく、彼独特の「飛行機面」というものである。飛行機が滑走して離陸するような打ち方である。背の高い彼がそれをやれば誰もかわせないほどの鋭さだった。さて卒業後、私は司法検察

秋田清夫 (27回生)



京大剣道部時代（旧制第三高等学校道場の前で）
後列左端大西君、左から4人目筆者、前列中央斎藤正利師範

の道を歩み、大西君は実業界に入り川崎汽船に入社した。以後年賀状をやりとりするくらいで、会うことはなかった。ところが、いつ頃からか大西君の消息が分からなくなった。京大剣友会にも連絡がないというところで、剣友雑誌にも住所が載らなくなった。多分お祖父さんやお父さんの跡を継いで政治家になるための修行でもしているのだらうと思っていた。その頃お父さんの大西正男氏は衆議院議員で、郵政大臣にもなっていたからである。

ところが、数年前のことである。剣友会の会合で彼と同年の剣友M君から、大西君はタイに移住し現在バンコックに居住しているようだと言われ、驚いた。何とか連絡が取れないものかと思っていたところ、今年の5月下旬M君から「大西君が一時帰国するそうです。その機会に東京近辺在住の同学年剣友が中心となって集まり彼を囲んで一杯やることになりましたが、先輩は大西君の高校の先輩だそうですから真っ先に電話しました。出席していただけますか」との電話があった。「喜んで」ということで6月



02年夏よさこい祭で。左端筆者。

多くの友人と土佐高のOBの方々の協力であった。同じ土佐高生の祭好きという血が流れているのか、OBにはよさこい祭運営の関係者の方が多く、何もわからない私達にチーム作りの手ほどきを一から教えて下さったり、私達の考えを理解して募金に協力して下さいたり、多くの無事成功を収めることができた。テレビ中継されたとき、「初めて出場する学生チームとは思えない仕上がります。」と、アナウンサーの方が紹介してくれたのを聞いて、思わずにんまりしたものだ。これも土佐高の絆のおかげである。先輩方には本当に感謝しても感謝しきれない。お陰様で、今年もRINNは2回目の出場を果たすことができた。私は正直これほど土佐高の絆が強いと思っていなかった。しかし東京に出てきてその絆の強さ、素晴らしいさを感じるようになった。この縁は私のひとつの大きな財産である。これからこの縁を大切にしていきたい。また、このように素晴らしい先輩方に恵まれた土佐高のますますの繁栄を願ってやみません。

(次回に続きます 77回生)

ふるさとへの手紙 (二)

東京女子大学四年 松下倫子 (75回生)

大学に進学し、東京に出てきてから早くも4年が過ぎようとしている。私の部屋には8冊のアルバム、約二〇〇〇枚の写真が本棚の一角を占めている。この大学生活の間に撮りためたものだ。その中には大学やサークルの友人と撮った写真もあるが、半分は土佐高の友人と撮ったものである。

土佐高の友人とは、何かある度に、いや、何かがなくてもしょっちゅう集まっては昔話で盛り上がりつつある。そんな集まりから生まれた75回生を中心とするよさこい祭の踊り子チーム、「RINN」の思い出も、私のアルバムにはたくさん収められている。踊り子チームを作るとい



03年夏RINNの仲間と。右端筆者。

「初めて出場する学生チームとは思えない仕上がります。」と、アナウンサーの方が紹介してくれたのを聞いて、思わずにんまりしたものだ。これも土佐高の絆のおかげである。先輩方には本当に感謝しても感謝しきれない。お陰様で、今年もRINNは2回目の出場を果たすことができた。私は正直これほど土佐高の絆が強いと思っていなかった。しかし東京に出てきてその絆の強さ、素晴らしいさを感じるようになった。この縁は私のひとつの大きな財産である。これからこの縁を大切にしていきたい。また、このように素晴らしい先輩方に恵まれた土佐高のますますの繁栄を願ってやみません。

26日夕方東京日本橋3丁目にある小料理店に行った。約30分程早めに午後5時半頃行くと、剣道部当時の主将だった先輩、我々在校生に稽古をつけてくれた卒業生の先輩のほかに後輩2、3人が来ており、それから次々に5、6人やって来たが、その内の1人が入ってくると真直ぐに私のところへ来て会釈し「しばらくででした。ご無沙汰しております」と挨拶するので見ると昔の高い浅黒い男である。誰かと思つてよく見ると、何と大西君ではないか。昭和31年大学卒業以来一度も会ったことがなく、47年振りの再会であり、それにタイに居住しているせいであろう、あの色白のハンサムボーイが日焼けして浅黒くなっているのがある。すぐには分かるわけがない。それにしても大西君がすぐ私に気付いて挨拶してくれたことは嬉しかった。

久し振りに大西君を交えての痛飲であったが、飲酒中彼が断片的に語ったところによると、彼は日本からタイに移住して7年になり、バンコックでノンビリと年金生活をし、時々依頼されて翻訳の仕事をしている。タイは物価が安いので年金だけでも結構よい生活ができるということで、永住のつもりでいるような口振りであった。

私が「そうすると、君はタイに骨を埋める気であるがだよ。」と土佐弁で尋ねると「そうなると思います。」とはっきりと言ったが、その表情はさわやかなものであった。約2時間後いつの日かまた会うことを約して分かれたが、若干うらやましいという気持ちと、土佐の名門大西家の御曹子がタイ国に骨を埋めるといふことに、ちよつぱり淋しい思いがした。

大西君の今後益々のご健勝とご多幸をお祈りするとともに、同君が日本とタイの親善のために一層力を尽くされることを希うものである。

追記 (東京法務局所属公証人)

京大剣友会員に、70回生の吾妻睦君(京大大学院法学研究科。米国留学中)がいる。

彼は京大剣道部現役時代主将を務め、学生剣道界、特に関西学生剣道界に名を馳せ、しばしば京大を勝利に導いた滅法強い剣道の猛者であること同窓の諸兄姉にお知らせしたい。

第7回土佐高ハイクの会

木曾駒ヶ岳しらび平と昼神温泉の旅

幸徳正夫 (37回生)

小生の土佐高ハイクの会の初参加を決意させたのは、同期の中村(旧姓山内)裕子さんの一言である。「あんたも土佐高ハイクの会で山へ行かんかね。山へ登らん人もいっぱいおるけん。そう腰痛、腰痛とこわがらんでもええわね」そのユニークな誘いに、腰痛持ちではあるが「理想は高く、目標は低く」を胸にハイクの会への初参加を決めた。

7月19日の出発日の新宿センタービル前には懐かしい顔が集っていた。そのうちの1人が「ありや、こりやまた久しぶり。卒業以来じゃおか」



と握手を求める。先輩の方からは恐縮なことと思っていると「38回生の三宅ヨシロウです」と言葉が続く。二度童(にどわらし)前後の歳ともなると誰が先輩で誰が後輩か皆目見当がつかない。

参加者33名が揃ったところで貸切バスは木曾駒ヶ岳へ向けて出発した。出発して1時間後、最初の休憩所「談谷坂」で一息入れ、次の散策地奈良井宿へと快調に走るバスの中で、幹事の橋田君(37回生)の恵美子夫人が、「先程の談谷坂のトイレに忘れ物があつたと、今連絡がありました。この旅行に関するパンフレットが入っているの、ハイクの会の誰かであることは間違いないのですが、誰ですか!」と学芸の才媛らしくキツとした顔で皆に身の回り品をチェックするように必死の訴え。身に覚えのない面々には応じようもない。バスはひたすら走り続ける。困り果てている彼女に「あんた、さっき何か持っ

てバスを降りたけど、それはあるかね」と向かい座席の中村さんの声。一瞬橋田夫人の呼吸が止まった。「いかん!

私じゃ、どうしよう、昼食のチケットもホテルのチケットも皆んなのお金全部入っちゃうに」と見るも気の毒な様子。一同とて内心穏やかならず。以下は紙面の都合上割愛するが、善良な人に拾われたチケットも現金も無傷で後日橋田君



宅に届けられた。橋田夫妻の人徳であり、人情もまだまだ生きている。

バスは何事もなかった如く奈良井宿へ着いた。往時を偲ぶ宿場町を往時の青年男女が仲良く楽しげに散策する姿は何ともアットホームな雰囲気。

次いで訪れた妻籠宿もしばし世間の憂さを忘れさせ郷愁を誘うてくれた。

昼神温泉の夜の宴会はよく飲み、よく食い、よく喋ること。小生の同窓会における泣き所は、共通の話題のためにはどうしても土佐高へ戻らなければならぬこと。歳を重ねて美しく正しく美

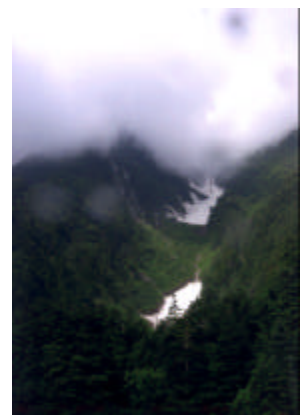
しく? 生きている現在を語る暇もない。「しかし、よう立ち直りましたねえ」との38回生の言葉には有り難くも絶句。

翌7月20日は、しらび平からロープウェイで千畳敷へ上がり、33名中15名は諸般の事情で目標の木曾駒ヶ岳を手前の宝剣岳に変更して登頂した。

山頂は、ガスが深く立ち込め壮大な景色は何も見えなかったが、勇気ある人たちの登頂の証しとして記念写真を38回生の窪田君が撮ったとのこと。

18名はボウルを二つに割ったような千畳敷カールを散策。

小生も、シラビソウ、ミヤマシデ、シナノキンバイなどの高山植物が「無理をせんがええ」と慰めてくれる中を目標どおり無理せず、楽せず、あてにせず、氷河地形の千畳敷カールの散策に努めた。下か



三軒 ● 和光

十有楽町

中央通り

一新種

サッポロビール ●
ワイオン

松坂屋

土佐酒蔵

ルノアール ●

東京温泉

東武ホテル

日本経済社

築地第一ホテル

明治通り

昭和通り

土佐酒蔵

度に参加を。代表幹事窪田君（38回生）、幹事の橋田君、中島君（38回生）には、旅行の立案実行にあたり並々ならぬご苦労を頂いた。心から感謝申し上げる。



乃木坂

赤坂駅

PLAZA MIKADO

クスリ

赤坂通

さくら銀行

山王下

TBSホール

一ツ木通り

みずじ通り

土佐

八色鳥

日枝神社

赤坂見附

小料理 赤坂「土佐」

港区赤坂3-13-2
アダンビル 4階
電話 3586-9454

パティスリー・プロポジション ヴェール ヴェール

土佐中学・高等学校／土佐中学・高等学校同窓会本部 会計幹事 千頭裕 〒780-8014 高知市塩屋崎町1-1-10
(TEL)088-833-4394(FAX)088-833-7373(E-mail) tosa@tosa.ed.jp(HP)<http://www.inforioma.or.jp/tosaabog/>
土佐中学・高等学校同窓会香川支部 事務局長 武山正人 (担当：野村喜久) 〒760-8573 香川県高松市丸の内2-5四国電力(株)
(TEL)087-821-5061(FAX)087-826-1074(E-mail) nomura11741@yonden.co.jp
土佐中学・高等学校同窓会広島支部 事務局長 山崎迪子 〒732-0062 広島市東区牛田早稲田1-24-7-210
(TEL)082-227-2656(FAX)082-227-2656(E-mail) myamazaki@do2.enjoy.ne.jp(HP)
土佐中学・高等学校同窓会関西支部 事務局長 原田和人 〒530-6001 大阪市北区天満橋1-8-30 OAPタワー1F アリコジャパン内
(TEL)090-1073-7822(E-mail) harada73@hotmail.com(HP)<http://www.tosa-ko.org/kan sai/>
土佐中学・高等学校同窓会東海支部 事務局長 南 毅一 〒460-0024 名古屋市中区正木3-13-13ビル新金山1階
(TEL)052-332-3370(FAX)052-332-3372(E-mail) ***** (HP)<http://www.sun-inet.or.jp/~bunmura/>

★出版レーダー★

- 大橋一章 (36 回生) 編著
「東大寺」
- 里文出版 本体二五〇〇円 2003.09
大原健士郎 (24 回生)
「日々是好日…森田療法は創造的体験療法」
- 白揚社 本体一九〇〇円 2003.06
「満足人生…私のデザイン」
- 三笠書房 本体一三〇〇円 2003.07
公文俊平 (28 回生) 監訳
「リーディングス情報社会」
- N T T 出版 本体三二〇〇円 2003.06
「スマートフォン…〈群がる〉モバイル族の挑戦」
- N T T 出版 本体三六〇〇円 2003.08
倉橋由美子 (29 回生)
「老人のための残酷童話」
- 講談社 本体一六〇〇円 2003.09
田島征三 (34 回生)
「とべバツタ」
- 偕成社 本体九八〇〇円 2003.11
「おならのしゃもじ」
- 教育画劇 本体一二〇〇円 2003.09
「きみはナニを探してる？」
- アトーン 本体一五〇〇円 2003.05
田島征彦 (34 回生)
「ななしのごんべさん」
- 童心社 本体一五〇〇円 2003.06
野田正彰 (37 回生)
「背後にある思考」
- みすず書房 本体二六〇〇円 2003.08
坂東真砂子 (51 回生)
「神祭」
- 角川書店 本体四三八円 2003.06
「快樂の封筒」
- 集英社 本体一三〇〇円 2003.08
森岡浩 (55 回生)
「名字の謎がわかる本…あなたのルーツをたどる」
- 幻冬舎 本体五三三円 2003.07
高遠裕子 (60 回生) 訳
「大魔神 (ジニー) が教えるマーケティングの極意」
- シヤック・トラウト著
阪急コミュニケーションズ
本体一二〇〇円 2003.08

ここからは雑誌に掲載されています

- 川島章弘 (33 回生)
「5 軸加工機における回転軸系の運動誤差原因の診断に関する研究 (第1報) 回転誤差の診断法と診断手順」
- 精密工学会誌 69(5) 703-709 2003
塩田 潮 (40 回生)
「FOCUS 政治 小泉総裁衆勝で焦点は次期総裁選挙 新党人気にいらだちマニフェストで対決」
- 週刊東洋経済 5846 110-111 2003
「FOCUS 政治 小泉マニフェストで」 「自民党壊し」 仕上げ 党優位の政策決定権 内閣への奪回を画策」
- 週刊東洋経済 5839 136-137 2003
「FOCUS 政治 三位一体改革の迷走 財務省依存を露呈 経済再生に暗雲」
- 週刊東洋経済 5833 112-113 2003
「Focus 政治 反小泉勢力に広がる諦観 対抗馬を絞れないキンクメーカ不在」
- 週刊東洋経済 5825 130-131 2003
「FOCUS 政治 地方からの挑戦と永田町組の敗北」
- 週刊東洋経済 5817 106-107 2003
「Focus 政治 小泉支える橋本派。国民見放せば一変」
- 週刊東洋経済 5810 100-101 2003
「Focus 政治 小泉、総裁再選失敗でも首相続投する道も」
- 週刊東洋経済 5803 110-111 2003
「Focus 政治 3 月危機」 照準に戦略家・北川登場」
- 週刊東洋経済 5798 112-113 2002
児玉隆也さんと「田中角栄研究」
- 文芸春秋 81(1) 90-92 2003
「政界レポート 総裁選、参院選を巡る暗闘 動乱永田町! 「小泉VS小沢」の最終戦争」
- プレジデント 41(18) 34-37 2003
現代の肖像 北川正恭・前三重県知事」
- Aera 16(31) 60-65 2003
「特別研究 改めて小泉政治 「2 年 4 か月」の功罪を問うあの壮大な 「10 大改革」の進捗度を徹底追及」
- ニューリーダー 16(9) 8-14 2003
「地方のリーダーが日本を変える (8) 山田宏 東京都杉並区長 市町村は「行政の小売店」

- 区長は「店長」 「行政の流通革命」 目指して果敢に挑戦」
- ニューリーダー 16(8) 42-46 2003
「地方のリーダーが日本を変える (7) 浅野史郎・宮城県知事 「逃げない 隠さない」ごまかさなない 情報公開へ 県庁と警察を相手に孤軍奮闘の「闘う知事」」
- ニューリーダー 16(7) 46-50 2003
「地方のリーダーが日本を変える (6) 逢坂誠二・ニセコ町長 北海道知事選を突如断念した真意と一部始終 新行政システム 「ニセコ・モデル」に全国が注目」
- ニューリーダー 16(6) 40-44 2003
「地方のリーダーが日本を変える (5) 木村良樹・和歌山県知事 公共事業改革と「緑の雇用事業」で国を動かす 「リセット元年」に繰り出す次の一手に注目」
- ニューリーダー 16(5) 46-50 2003
「総理大臣の辞め方」
- 本の話 9(1) 24-27 2003
田島 征彦 (34 回生)
「沖縄県立芸術大学でのワークショップ 「ファンタジーを染める」 から 型染の絵本を作ろう」
- 月刊染織 n. 269 27-32 2003
野田 正彰 (37 回生)
「心の教育」は学校をどこに導くのか -- 精神科医が見た教育基本法改悪の倒錯」
- 前衛 765 164-173 2003
「告発 「民間人校長」 はなぜ自殺したのか」
- 世界 716 115-121 2003
「心のノート」の危険性」
- 人権と部落問題 55(1) 7-13 2003
森岡 浩 (55 回生)
「珍しい読み方をする名字」
- 月刊しにか 14(7) 46-49 2003
森崎 初男 (41 回生)
「経済学・経済政策 展開型ゲームと寡占市場」
- 企業診断 50(8) 122-125 2003
「経済学・経済政策 ゲームの理論と寡占市場」
- 企業診断 50(7) 118-120 2003
「経済学・経済政策」
- 企業診断 50(5) 113-115 2003
宮岡 等 (49 回生)
「向精神薬長期服用時の副作用と治療終結」
- こころの科学 110 81-84 2003